

『チョコレートと青い空』を読んで

◆A.H. さんより

この本を最初に開いたとき、ひらがなが多く、文字が大きく、漢字にふりがなまでふってあり驚きました。「小学生用じゃん」と、思いました。

本を読み終えたときの気持ちは、何とも言いあらわせません。様々な思いが複雑に入り混じっていました。

エリックさんは、とても素敵な人だと思います。家族や国を愛し、誇りに思っています。同時に、今やらなければいけないこと、自分にできることをしっかり理解し、行動をしています。

きっと、エリックさんの欲は、人のため、子どものため、家族のため、そしてガーナの国のためになっているんだと思います。

「無関心は最大の敵」。この話に限らず、今までの自分を思い返すと、本当に恐ろしいものです。わたしも、本の中のお母さんや周囲たちと同じことを思っていました。「ガーナといえばチョコ」。まさかこのような事実があったなんて少しも思いませんでした。

「バイトしたい」「お金がほしい」「勉強したくない」ということをよく耳にしますが、ガーナの国の子どもたちからすれば、このような欲や悩みは幸せなものなんだろうな、と思いました。自分も含め、わたしたちは恵まれすぎたこの環境に甘えていてはいけないと思いました。自分のためだけの欲じゃなくて、誰かのための欲が今後増えていき、それが目標になり夢になっていくらしいなあと思いました。

◆A.S. さんより

衣食住。これは私たちが生きていく中で、1つでも欠けてはいけない大事な3つの要素だ。不可欠な3つの中で最も必要なのは、「食」だと私は思っている。食べることができなければ、普段の生活で使うエネルギーはできない。様々な食物から栄養を摂取して、私たちの身体は成長し、元気に活動できている。つまり「食」がなければ成長できず、死ぬだけなのだ。

スーパーに行けば簡単に食べ物が手に入る。当たり前のことだが、置いてある食べ物1つ1つができるまでは、大変な道のりがある。

農家がなければ当然食べ物はない。天候ですぐ出来が変わってしまう。そんな苦労をするとわかっていないながら、私たちに「食」を与えてくれる。農家のひとたちは身も心も強いと思う。

今回『チョコレートと青い空』を読んで、私は「食」に対して考え直した。

私はチョコレートが大好きだ。いつも安く手に入っている。これは、発展途上国の人々が、安い賃金で働いているからだ。幼いころから、働いて学校に行けない。私たち日本人にはありえないことだ。現地の人が大変な思いをしているのを知らず、私たちは食べている。“無関心は最大の敵”なのだ。少しでも、現地の人々を思いやる心があれば、笑顔をきっと見れるはずだ。

私たちに今、いちばん必要なことは、自分を第一に考えず、外の世界に目を向けることだ。

人種や文化、言葉の違いがあっても、みな同じ人間。世界中で困っている人たちを助けるためにも、現地でおこっている問題を知り、自分ができることをやっていくべきではないだろうか。

◆Y.S. さんより

『フェアトレード』そんな言葉、初めて知った。17年間生きてきて、初めて聞いた。それだけ私は表面化されてるにしろ、そうでないにしろ、無関心であったということであろうか。

例えば、現代社会の資料集の『世界の問題』等のコラムによく載っている、白黒の子どもが写っている写真。どこまでも続いている荒野に裸足で立っている子どもの顔は、どこか寂しそうで、辛そうで、それに少しだけ、こちらをにらんでいるように見えるのは、私だけだろうか。最初にこの写真を見た日本の子どもは誰しも、「ああ、大変そうだな」ほどにしか感じていないのではないだろうか。現に、私もそうであったように。そこで習ったのは『南北問題』であって、『北半球と南半球の国々の経済格差の問題のこと』であった。ただ、何故『南北問題』が発生しているのか、ということは習ったかどうか覚えていない。おそらく、これが『知ら

ないことが罪』、『無知の恥』の一種なのであろう。

日本は今、自分たちの国のことでいっぱいいいっぱいなのだと思う。また、内閣総理大臣がかわったらしいが、数年後的小中学生は、首相の名前を覚えることでさえきっと一苦労であろう。

こんなにも日本は政権交代や経済問題などで絶えず揺れ動いているのに、エリックさんのいるガーナの状況は少しも変わっていないのであろうか。

私もいつかどんな形でもよいから、世界を見てみたいと思う。

本当の世界の姿を。

◆M.O. さんより

一枚100円にも満たない板チョコの影には、日本人には分からぬガーナの苦労がある。私たちが安く板チョコを買うということの引きかえにガーナの人々は学校へ行って勉強をすることもできずにいる。そして自分が普段食べるものの農地も減らされている。高い賃金で働いているというわけでもない。現地の人にとってはそういう生活が普通なのかもしれないが、毎日学校に通い、板チョコだって簡単に買える生活をしている私たちはぜいたくをしているはずなのに、さらに生活の向上をめざそうとする。

人の原点は農業だ。食べるものがなくては生きてはいけない。昔はたくさんの家が自給自足の生活をしていたが、今では農業はただの“商品”となってしまった気がする。こう思うようになったのは先日、父に「農業って赤字？ 黒字？」などという、今思えば恥ずかしい質問をしたからだ。父は「そういう考え方になったから世の中おかしくなるんだ」とだけ言っていた。きっと私がくみとれなかった意味もあるのだと思う。

消費者の影には生産者がいる。当たり前の話だが、たくさんの人間がかかわっている。農業が“商品”になつた今、どちらかが不公平になることは避けなければならないはずだ。働かないと自動的にお金が入ってこなくなる。もちろん消費者側も働いて得たお金なのだから、お互いに良い取り引きができると思つた。

◆Y.O. さんより

甘くておいしいチョコレート。私も大好きだ。だが、この本を読んで周二のように、チョコレートに手をつけられなくなった。

「あまいチョコレートは、こうきゅうひんです。まずいいえのこどもは、めったにたべることが、できません。」

エリックさんのこの言葉に絶句した。自分の国で原材料が生産されているというのに、それを使って作られるものを口にすることができない。そして子どもの過酷な労働だ。長時間労働・低賃金。これほど悲しいことはないだろう。ガーナの人々のことを考えると、今まで幾度となくしてきたチョコレートがたまらなく高価なものに思えてくる。

エリックさんはとても良いことを言っている。「しらないことが、いちばんのてき」だと。そうすると、私も一番の敵がいることになる。私自身、ガーナではチョコレートがよく食べられるものだと思っていたのだ。当然、エリックさんの言葉に恥ずかしくなった。何も知らなかつた自分に、怒りを感じた。

そして自分にできることは何か、と考えたのだ。考えてみたものの、やはりフェア・トレードのことしか出てこなかつた。私はこの本で、フェア・トレードを初めて知つた。どんなに値段がはつても、「公正な取り引き」をすることはとても大事だと思う。

エリックさんのように自分が人々のために何ができるかをよく考え、これからの行動に生かしたい。